

建築家の

往復書簡

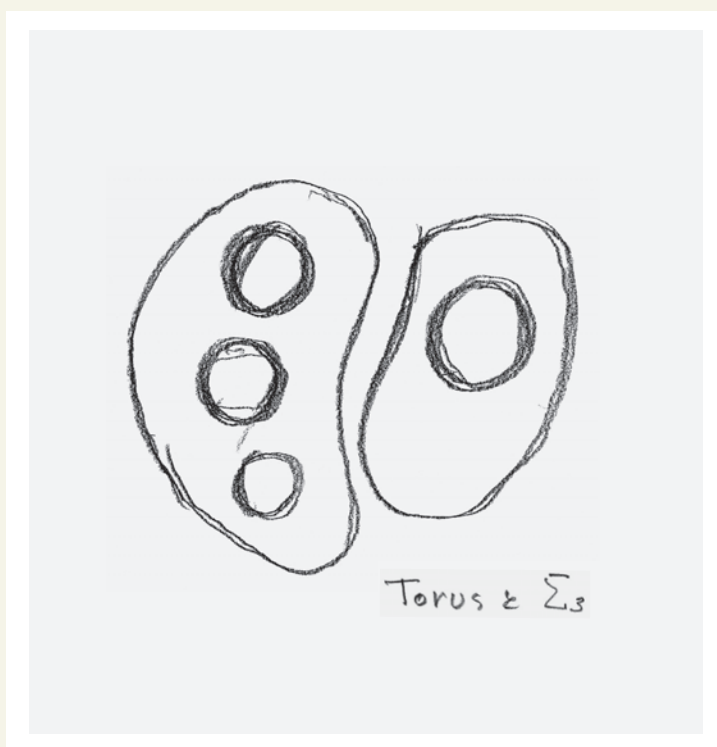
原広司 — 磯崎新

3
……
何事かが
生起しようとしている
：現場

磯崎新様

先回のお便り、たいへん面白く読ませて頂きました。磯崎さんのおっしゃる「現場」が、如実に浮き彫りにされてきて、その意味するところが次第に明らかになってきつつあるように思われます。

おそらく、海外各地で活躍しておられるからでしょうか。「現場」とは、まず、「いまそこで何事かが生起しようとして



TorusとΣ₃

Hiroshi Hara

原広司

いる場所」である。この場合、何事かは、建築をめぐる何事かですから、建築家にとっては、重大な出来事でない筈はありません。しかし、普通なら、個人史のうえてみれば、おおむね、そうした体験の継起で終る筈なのですが、そうはゆかない。その場所が、日常的な身のまわりの外にあるためか、「歴史的な諸関連と改めてかかわらざるを得なくなる

9010938963

北海道支社 Tel.011-330-1710 | Fax.011-370-1717 | 〒065-0008 札幌市東区北8条東10丁目1番1号
東北支社 Tel.022-301-9712 | Fax.022-301-9726 | 〒981-0933 仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台
首都圏統括支社 Tel.03-5541-7050 | Fax.03-5541-7129 | 〒104-0032 東京都中央区八丁堀三丁目10番5号 INAX東京ビル
関東統括支社 Tel.048-668-1227 | Fax.048-666-7047 | 〒331-0811 さいたま市北区吉野町一丁目23番6号
中部統括支社 Tel.052-310-1703 | Fax.052-310-1701 | 〒461-0005 名古屋市中区東桜一丁目4番16号
北陸支社 Tel.076-264-1710 | Fax.076-264-1755 | 〒920-0025 金沢市駅西本町一丁目15番26号
関西統括支社 Tel.06-6539-3500 | Fax.06-6539-3524 | 〒550-0012 大阪市西区新町1丁目7番1号
中国支社 Tel.082-850-3917 | Fax.082-850-3920 | 〒731-0113 広島市安佐南区西原六丁目11番8号
四国支社 Tel.087-815-3377 | Fax.087-815-3390 | 〒760-0079 高松市松縄町1087番地3
九州支社 Tel.092-471-1741 | Fax.092-471-1751 | 〒812-0007 福岡市博多区東比恵二丁目8番16号

●社名・住所の変更は、Faxまたはハガキで、最寄りの支社にご連絡ください。

INAX

For Precious Life

カ-RP181

場所」として浮上してくる。(今回の場合は、ミステリーの類型では、ディクソン・カーに近いのかな。過去が立ち現われてくるという意味では。画家が浮上してくるころは、ルカレの系統かもしれない。いなぬことですが。)

磯崎さんの短かい記述では、「何事かが生起しようとしている場所」への接近からまず予兆が、身体上の異変として現象する。それが、「歴史的な諸関連と改めてかわらざるを得ない場所」へと転化するの、ひとつには、比較的客観性のある歴史的な事実関係、例えば、日中の歴史のうえで、国際関係と切り離すことはできないが、むしろ、そうしたことどもが、美学上の対象としてまとめられる。つまり、一言で表記するならば、「現場」とは、美学的構想力そのものである。それ故に、少なくとも、今回の場合は、アナキーであり、フィクショナルであり、アンリアル(uneal)である。つまり、仮に全く同じ状況を体験する複数の人がいるとしても、「現場」が構想力そのものであるとすれば、それぞれに、異なった姿として「現場」は立ち現われてくる。その差異は、ひとつに、時間の飛び方すなわち現在の時点と過去

のさまざまな時点との結び方によって特性づけられる。磯崎さんの記述では、例えば重源の時。あるいは、毛沢東の時。何故なら、それらの時点が、「過剰」にかかわっているから。もし、美学上の課題として、「過剰」が欠けているとすれば、重源の時も、毛沢東の時も、「現場」には、現れないのかもしれない。

ところで、「時間の文法」についてですが、私が「空間の文法」と言う時には、基本的に、空間の様態(モード)の変化を意識していますので、空間には時間がパラメーターとして含まれています。ただし、この時間は、とても歴史としての時間にはおよびつかず、単調に経過する時間です。つい最近、ノーバート・ウイナーの『サイバネティクス』を改めて覗きましたが、彼は冒頭で、ニュートンの可逆的時間とベルグソンの不可逆的時間とを対比し、これからは、科学といえども、後者でゆかなくてはならないとしています。その通りであるにはちがいないのですが、時間を広く捉えようとするれば、アイヌシタインの相対的時間もあれば、ミンコフスキーの世界像

としての時間もある。さらには、旧約の始めと終りが確定している必然の時間論もあり、これに鋭く対立するイスラムのカラームの因果律を全く排除した偶然の時間論もある。この場合は、時間が、連続ではなくこま切れになっている。ボルヘスの美学的な時間は、いま起っている出来事は、過去のある場所、ある時点で生起したという意味で、その都度の二点が同一視される奇妙な多様体になっている。そんなことで、「時間の文法」は、それぞれの枠組みにおいてのみに限定される構造というか、約束になっっているような気がします。

磯崎さんの場合、あの「現場」、この「現場」は、それぞれに差異があり、一方ででは反復や継続があると思われませんが、いかがでしょうか。

二〇〇九年十一月十三日
原広司

時

時間があらゆる存在の内側にひそんでいる。出自も分からぬままこんな思考法が、五〇年代の学生にまぎりはり込んだのだと思います。これをおっかけて、私は「プロセス」を都市・建築論の鍵にしてみました。六〇年代の中期になって、貴兄と一緒にやった「空間から環境へ」展のコンセプトを継いで、私は「サイバネテック・パイラメント」を乱用してい

ました。勿論、ノーバート・ウイナーの著作が出現していたからです。

プロセスは非可逆的だ。サイバネテックスでは時間が無方向化され、多元化していることはいさう承知はしていたけど、空間のほうに身体をパラメーターにすればよくなじむと思っていました。偶然のめぐり合わせて、「間——日本の時

通俗科学解説から「時空間」とつけ加えました。私はこれを加えたことにまだに不満です。「間」ひとこといいじゃないか。ここに時間も空間も含まれている。時間や空間などの概念がなくとも、東洋では充分にコトが足りていた。

西周が、TIME、SPACEを日本語に翻訳するとき、間マに時トキと空ソラを加えて造語した。この苦勞を西欧にお返しするには、その両方である「間」ひとことがミステリアスに立ちあがればいい。カントでさえ、時間と空間は批判の対象からはずしている。いまにして想うと、こんな反応をすること

が、私が自嘲的にカントの退行といったそのことではなかったかと思ったりしています。

六〇年代にポストモダンを思想的にリードした連中が、八〇年代なかばからいっせいにカントを再参照しはじめました。それを私の悪いクセでカントの退行などとヤユつてしまった。坂部恵さんにたしなめられたりしました。退行といわず回帰というべき、というわけでした。近代の世界はそれだけカント的思考形式にしばられているのです。

ともあれ、カント的思考形式から逃れるには更なる退行

空間(一九七八)という展覧会をオルガナイズしました。パリの側面企画でした。オリエンタリズムから逃れる道はあるか、これが私のひそかな目標ですが、複雑骨折みたにややこしいことがだんだん分かってきます。私は最初「間」二字の展覧会を提案したのですが、ロンバルトがこれじゃ分りにくいと主催者にサジェストしたらしく、ミンコフスキー時代の

しかあるまい。このときは道元にとびました。『正法眼蔵』の「有時の巻」に「時は飛去す」という一節がありました。多くの解説がありますが、私は「時間は想ったときにやってくる」のだと解釈することになりました。ハイデガー以来の「いま、ここ」なんて、十三世紀の禅坊主がいつてしまっていた。

その頃、紆余曲折あった茶席ができました。大徳寺真珠庵先代山田宗敏老師に有時の二字を揮毫していただき銘板に彫りました。東京、御殿山にできた有時庵です。このようなはるかな退行の記念に、私はいまでは有時を号にすることにしました。時間じゃダメさ。空間なんてバカバカしい。有時ならウジ虫のように響いてくるではありませんか。

たしかに時間にとらわれています。非可逆的時間のなかにある身体は、一杯のむたびに加速される気になります。木村俊彦さんのメモリアルの後、私のうちに流れたとき、トヨオさん、リケンさん、それに高橋(寛)晶子夫妻の話は『20世紀少年』でもありません。時間が停止してしまいました。可逆的にもみえたのです。またまた散漫になって、貴兄の直球を返していません。時間はますますアンキャニイになつてみえます。誰が仕掛けたのか、それをつきとめたい。だから有時。その印章をついたので使わせてもらいます。

二〇〇九年十一月十七日

磯崎新



有時庵 [写真: 古館克明]

はらひろし——建築家一九三六年生まれ一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエ・エッセイ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司・アトリエ・エッセイ建築研究所所長。いそざき、あらた——建築家一九三三年生まれ一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。